

7 月定例教育委員会会議録【概要版】

開催年月日	令和3年7月21日（水）	場 所	市役所本庁 災害対策本部室
開催時間	13時30分 から 15時10分まで		
出席者	教育長	澤野 幸司	
	教育委員	田中ヨシ子、久世由美子、高橋勝栄、甲斐千尋	
	参 与	尾畑教秋、赤木繁男、高森賢一、黒木幹生、志道里香、松田康寿、 蓑田範夫、工藤靖治、吉田 等、吉岡秀晃、井本治久	

◎ 議 事

◆議案第17号 令和4年度使用小学校用教科用図書の採択について（学校教育課）

◆議案第18号 令和4年度使用中学校用教科用図書の採択について（学校教育課）

● 学校教育課長より以下の説明が行われ、質疑の後、異議なく承認された。

○ 小学校用教科用図書の採択について、法律で採択権者である市町村教育委員会が、毎年度、採択するということになっているので、例年この7月の定例教育委員会で付議している。本年度使っている教科書を採択してはどうかという提案。

○ 中学校については、社会科、歴史のところで、新たな検定合格教科書が出た。自由社というところが新たに検定を合格し、見本本を各自治体に送付している。それらをもとに、北部採択地区協議会で研究をして、7月7日の協議会において選定した結果、本地区は社会歴史が日本文教出版、昨年度採択したものと同じ教科書で良いのではないかとということで、選定をいただいている。

○ 選定理由については、例えば、後半にインターネットのデジタル事例を活用した学習ができたりする工夫が見られることや、人権問題に関する記述が、影の部分ではなく、当時の社会の文化を支えるなど光の部分の記載もしっかりされていること、QRコード、二次元バーコードの掲載など、昨年度一人一台端末が整備されたので、こういったものを使って、教科書だけでなく、デジタル教材も使った学びが可能であること、というような意見がたくさん出て、日本文教出版が一番いいだろうということになった。途中、協議会の議論では3者に絞られ、今採択している日本文教出版、それから新たに見本本が来た自由社、それから帝国書院も、1回目の協議の中では、内容的に本地区には合っているということで、この三つの中で議論を深めていった中で、最終的に先ほどの選定理由で、日本文教出版が良いのではないかとということになった。

- これを、北部地区の各市町村教育委員会で、本日のように採択をそれぞれ行う。もし、ここで、各市町村で別のものがあるということになったらまた採択地区協議会をやり直し、再協議をするという法的な流れになっている。
- 本市教育委員会事務局としては、北部採択地区協議会で選定された、日本文教出版で歴史教科書採択、それからその他は同じ、昨年度と同じ教科書の採択を提案する。

◎) 高橋委員、久世委員、田中委員には以前からこの年度の教科書採択に関わっていただいているが、甲斐委員は今回初めてということもある。それを今回、採択協議会の中で、委員も全員見ていただいた上で、こういうふうな協議を深めたということになる。ただ、最終的に決めるのは、我々延岡市の子どもたちにはどれがいいかというのを決めるのは私たちである。先ほどの理由の中にもあったように、採択協議会の中では、保護者の視点、また教育委員会の視点、学校の指導という意味での視点、様々な点について、かなり議論した。去年採択しているからこれでいきますよってということではなく、最初、全部さらにして、もう1回どの教科書がいいか、すべて同じ土俵の上で検討しましょうということでスタートした。課長の話のように、最終的にこの3者がいいのではないかと、3者の中で絞り込んでやりましょうといった結果、やはり現在採択をしている日本文教出版の歴史教科書の方がいいのではないかとということになった。協議会に参加した委員からその議論の中で、気になったことがあれば補足をお願いしたい。

◎) 今度新しく出た自由社では、歴史の調べ学習の中に自分の名前のルーツを調べようというのがあった。佐藤さんとか、何とかさんとかお友達の名前が出てきて、武田さんとか、そして武田さんのルーツは武士だったというものがある。自分のルーツを調べる、調べて武士だということまでいいとしても、延岡市の場合は人権教育を大変重視している。江戸時代の歴史に身分制度が出て来たときに、自分のルーツは武士だったと知る活動。人権問題が誤った形で伝えられることになる。人間としての権利を大事にしていけないといけないのに、こういった調べ学習のために人権尊重ができなくなる。まず私は、延岡市としては、これは実態に合わないんじゃないかと話をした。それからやっぱり総合的に歴史というのは、織田信長ではないけれども、光の部分だけ、影の部分だけじゃなくて、両面から考えさせたい。信長は焼き討ちをしたけど楽市楽座もした。そういった多面的多角的に事象をとらえていくこと、それと連続性の中

で考えていくことが大事である。戦争の問題もこの自由社にはたくさん出てきた。戦争の問題、それは、非常にドラマチックに描かれ、子どもたちの興味をそそっている。それで国民が一致団結してこの戦争に取り組んだというくだりもある。確かにその戦時下において国民が一丸となって取り組んだことも事実であろうと思うが、やはりそこには国民の中にやっぱりいろんな戦争に対する考え方の方もいらっしゃるということで、与謝野晶子や内村鑑三、こういう人たちの意見の取り上げ方はどうなったんだろうかという質問をしたところ、内村鑑三、そして与謝野晶子のような戦争に対する違った意見を持っている人たちの取り上げ方は自由社ではしていないと。自由社の場合は、与謝野晶子は文芸面で取り上げられていて、他の会社の場合は、戦争に対する違った意見ということで取り上げられていたようである。やっぱり総合的に判断をして、延岡の子どもたちの実態には、やっぱり日本文教出版の教科書がいいのではないかなというようにことで意見を述べさせてもらった。

- ◎) 今、詳しく過程というか、選定過程を話していただいたが、そう言ったことに加えて、先ほど説明があった1人1台端末、子どもたちがタブレットなどでいろいろな調べ学習をやっているが、自由社のものはそういったQRコードなどがもうほとんどない。調べるときにはやっぱりちょっと難しいのではないかなという意見等もあり、今採択している日本文教出版に決まったところであった。